

へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績 (第6報)

富山県農村医学研究会、金沢大学 豊田 文一
金沢大学医療技術短期大学部 津田 光世

はじめに

健康と疾病の背景には社会環境があるといわれている。私どもの過去7カ年にわたる学童の耳鼻咽喉科検診も、この調査研究を通じて都会地とへき地農山村の健康と疾病の様相を把握し、併せて保健衛生の向上に資したいと考えたからである。過去をふりかえてみると、当該地域においては確かに罹病率の減少をみている。私どもの努力もさることながら、関係各位の配慮も無視できないものと思う。

私どもは昭和50年、富山県中新川郡上市町を中心として学童の耳鼻咽喉科検診を行った。その検診成績を記載し、これに基づいて卑見を述べてみたい。

検診成績

昭和50年5月、上市町小学校6校において行ない、これは過去の検診対象校と同様で、

そのうち上市中央小学校は主として市街地学童、その他の5校は概ねへき地農山村である。

被検学童数は1,434名、うち市街地学童1,132名、へき地農山村学童は302名であった。すなわち市街地は78.9%、へき地農山村は極めてすくなかった。(第1表)

各小学校の検診成績は上市中央小学校(第2表)、柿沢小学校(第3表)、大岩小学校(第4表)、白萩東部小学校(第5表)、白萩西部小学校(第6表)、白萩南部小学校(第7表)、それぞれの表示の如くで、疾患別、比率はこれにより参照されたい。

ただ市街地たる上市中央小学校とへき地農山村たる他小学校を比較すると第8表に示す通り、鼻炎ではへき地小学校は高率で、慢性副鼻腔炎、慢性扁桃炎では市街地は高率であった。

なお耳鼻咽喉科疾患罹患率は市街地、へき地農村の差は全くなく、これは興味ある事実と思える。

第1表 学校別、学年別学童数(調査対象数)

学校 \ 学年	1	2	3	4	5	6	特別	計	%
上市中央小学校	211	206	183	167	180	179	6	1,132	78.9
柿沢小学校	18	24	22	24	17	20		125	8.7
大岩小学校	7	4	11	3	8	11		44	3.1
白萩東部小学校	4	2	2	2	3	3		16	1.1
白萩西部小学校	13	11	15	8	13	16		76	5.3
白萩南部小学校	6	5	4	9	8	9		41	2.9
計								1,434	

検診成績

第2表 上市中央小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1			3	10			9	5	7	2	2	38	211
2				10			16	15	10	1	1	53	206
3			1	4			5	9	8		1	28	183
4				4			6	8	5			23	167
5	1	1	1	3			6	9	4		1	26	180
6				6			9	6	3			24	179
特			3				1					4	6
計	1	1	8	37	0	0	52	52	37	3	5	196	1,132
%	0.08	0.08	0.70	3.26			4.59	4.59	3.26	0.26	0.44	17.3	

第5表 白萩東部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1												0	4
2										1		1	2
3				1								1	2
4							1					1	2
5				1								1	3
6							1					1	3
計	0	0	0	2	0	0	2	0	0	1	0	5	16
%				12.5			12.5			6.3		31.3	

第3表 柿沢小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1								2	1			3	18
2							4	1	1			6	24
3				4			1	1				6	22
4				3				2				5	24
5								1				1	17
6							1	1				2	20
計	0	0	0	7	0	0	6	8	2	0	0	23	125
%				5.6			4.8	6.4	1.6			18.4	

第6表 白萩西部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1				3						1		4	13
2							1	1				2	11
3				1					1		1	3	15
4								1				1	8
5									1			1	13
6				1				1				2	16
計	0	0	0	5	0	0	1	3	2	1	1	13	76
%				6.6			1.3	3.9	2.6	1.3	1.3	17.1	

第4表 大岩小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1								1				1	7
2								2				2	4
3								1				1	11
4												0	3
5				1				1				2	8
6							1	1				2	11
計	0	0	0	1	0	0	1	3	3	0	0	8	44
%				2.3			2.3	6.8	6.8			18.2	

第7表 白萩南部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
1												0	6
2												0	5
3								1	1			2	4
4	1											1	9
5												0	8
6				1								1	9
計	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	4	41
%	2.43			2.43				2.43	2.43			9.7	

第8表 市街地、へき地別疾患別検査成績表

病名 学校	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 茸	鼻 中隔弯曲症	慢性副 鼻腔炎	扁桃 肥大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	そ の 他	罹 患 者 数	児 童 数
上市中央小学校	1	1	8	37			52	52	37	3	5	196人	1,132
	0.08	0.08	0.70	3.26			4.59	4.59	3.26	0.26	0.44	17.3%	
その他の小学校	1			16			10	15	8	2	1	53人	302
	0.33			5.29			3.31	4.96	2.64	0.66	0.33	17.5%	
合計	2	1	8	53			62	67	45	5	6	249人	1,434
	0.13	0.06	0.56	3.70			4.32	4.67	3.13	0.34	0.41	17.4%	

総 括

地域社会の変動の最も著しくあらわれるのは人口動態である。へき地振興法、あるいはへき地教育振興法など過疎化に対してあらゆる施策が行なわれているが、自然のすう勢は止まる所を知らない。私どもはこれを如実に知ることができた。それはへき地の児童数の動向である。例えば昭和44年白萩東部小学校70名、白萩南部小学校70名、白萩西部小学校92名を数えていたが、昭和50年は、それぞれ16名、41名、72名となり、ことに前2校において著しい減少を示している。この様相は検出される疾患について、影響をもたらすものであろうが、学校保健の上からも留意する必要がある。

私どもは本調査を開始したのは昭和44年で、昭和50年度は第7年次に当る。各疾患についての詳細な分析は更に回を重ね今後にゆずるとしても、本年度の成績について、いささか考察してみたい。

まずあげられるのは難聴である。この激減は極めて顕著で、昭和44年5.6%の高率を示し、医療とくに耳鼻咽喉科専門医の偏在を嘆ぜしめたが、現在0.6%で、東京都はじめ都会地学童との比率と大差なきまでに至った。これはもとより環境の改善も大きな要因かも知れないが、検診後の学校当局の積極的取り組みも大きな役割をもっているのではなかろうか。

また慢性鼻炎も10.7%より3.7%へ、これも減少している。ただ慢性副鼻腔炎の減少はさして著しくなく5.2%より4.3%へと止まる。しかし20年前の諸家の統計値、農村学童の罹患率50%前後と報告されているが、それに比較すれば今昔の感がある。

扁桃については慢性炎は4.9%より3.1%に、扁桃肥大は7.0%より4.7%へ、それぞれ減少している。もちろん数次にわたる検診で、その処置を指示され、かなり多数の扁桃

摘出を行ったものもあり、その影響かも知れない。

私どもはこの調査研究にあたり、留意したのは交通、文化も含めて環境の恵まれない地域の疾患の実態を把握し、検診とともにこれが改善を意図したもので、顧りみてこの目的が漸次達成しつつあるとみていいと思っている。もちろんあらゆる社会的条件において市街地に匹敵する所もあり、あるいは当然の推移かも知れないが、検診を通じて医療に対する啓蒙は、確かにあったと信じている。

なお、ここで附言したいのは慢性鼻副鼻腔炎であり、その成因について幾多の条件があげられているが、最近では体質的素因、これに関連してアレルギーとの関係がとり上げられている。この診断にはスクリーニングの意味で鼻分泌物の好酸球検索の細胞学的診断法が行なわれている。このことは鼻アレルギーの診断の積極的指標となりうるとされている。詳細は第5報に記載したので省略するが、私どもは鼻副鼻腔慢性炎症のすべてについて好酸球の検索を行なった。すなわち第9表に示すように市街地学童では28.6%、へき地農山村学童では19.2%で、前者が高率を示している。昭和49年度も同様の検索を行なったが市

第9表 鼻汁の分泌液中の好酸球検索成績

上市中央小学校	$\begin{matrix} \#4 \\ +22 \end{matrix}$	26	28.6%
	$\begin{matrix} \pm 26 \\ -39 \end{matrix}$	65	71.4
その他の小学校	$\begin{matrix} \#2 \\ +3 \end{matrix}$	5	19.2
	$\begin{matrix} \pm 6 \\ -15 \end{matrix}$	21	80.8
合 計	$\begin{matrix} \#6 \\ +25 \end{matrix}$	31	26.5
	$\begin{matrix} \pm 32 \\ -54 \end{matrix}$	86	73.5

街地20.5%、農村11.1%でやはり市街地が高率であった。また私どもがかって行なった富山県内大気汚染地区とされているある小学校学童では63.3%、中学校34.0%に認められたことからみれば遙かに低率である。これをもって直ちに大気汚染と結びつけることができ

ないが、上市地区の両者の差異は自然環境、とくに大気汚染という因子も無視できないように思う。子どもは機会をえてさらに追及してゆきたいと考えている。

む す び

子どもは昭和50年度富山県中新川郡上市町を中心として小学校学童の耳鼻咽喉科検診を行った。これをまとめると次の如くなる。

1. 今回の調査は第7年次であり、被検学童数 1,434名、市街地学童 1,132名、へき地農山村学童 302名であった。

2. 耳鼻咽喉科疾患の罹患率の動向は、昭和49年より急激に低下し、本年度においては17.4%で、市街地と農山村との差は全くなか

った。

3. 難聴は 0.6%であり、逐年減少を辿り、大都会における比率と大差なきにまで至った。

4. 鼻、副鼻腔の慢性炎症は、鼻炎では農山村学童は高率、副鼻腔炎では高率であったが、その罹患率は最近大きな変動はない。

なお鼻分泌物の好酸球の検出陽性率は市街地に高く、農山村は低率で、このことより環境因子の存在も否定できない。

5. 慢性扁桃炎、扁桃肥大については減少の傾向を示している。

本調査にご援助をいただいた上市厚生病院越山健二院長、ならびに町当局に敬意を表する。